

## 海外ニュース

## インドネシアは大豆が足りない

## 生産の現状

この国の大豆生産量は、現在 160 万トンぐらいであるが、需要の増加に追いつかず、大豆が足りずに、毎年 40～50 万トン輸入している。これをなんとか自給したい。これが長年の悲願なのである。

かれこれ 10 年以上前の 1983 年のことになるが、当時の農業次官ワルドヨ氏（後の農業大臣）はこう言った。『今、インドネシアは大豆が 132 万トン必要である。しかしわが国の生産は 70 万トンにすぎない。残りの 62 万トンは輸入しなければならない。大豆の生産を高め、自給達成しなければならない』。有力紙のコンパスに載った彼の発言である。

以来、大豆の増産に政府は非常に力を入れてきたが、いまだに自給は達成されていない。

## なぜ大豆が足りないか

はじめに述べたように、大豆の生産量は 160 万トンであるから、当時の 70 万トンと比較すると、2 倍以上に増加している。しかし需要はそれ以上で 200 万トンを超えている。消費の伸びと、人口増加による需要の伸びが、生産の増加を上回るからである。

インドネシアの農村は貧しい人達が多い。人口割合からすると 18.4% が貧困者であるという（1990 年センサス）。そして妊産婦の 60% が潜在的栄養不足者といわれている。彼らにとって肉類は通常手の届かない高価な食品であるが、大豆食品のテンペイや豆腐などは、安価で比較的容易に手に入りやすいタンパク食品なのである。

## 生産増大の方策

大豆の生産を増加するのに、二つの方法がある。一つは栽培面積を増やす。もう一つは収量を高めることである。この国ではこれまで前者に重点を置いてきた。面積を増やすことは、新しく大豆栽培地帯を開拓することになる。しかしこの新栽培地帯は、しばしば不適地であったり、農民の経験不足も伴って期待した生産を上げ得ていない。

私は、適地適作方式と合理的な病虫害対策で、後者の増収方式で行くべきであると進言している。インドネシアの大豆の収量を 1990 年の統計から、総生産高を栽培面積で割った数値としてみると、収量は 1.16 t/ha である。これを 1.5 t/ha に上げれば、自給は達成できるし、そのことは決して困難ではないと考えられるからである。

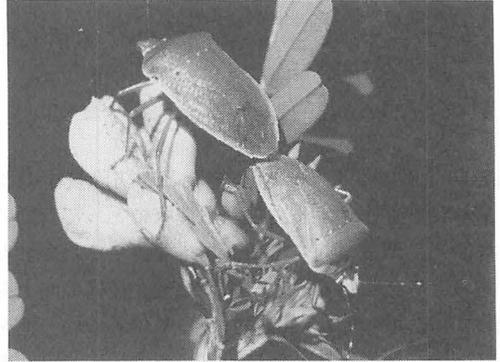


図-1 オトリ作物、ツノクサネム的一种に集まるミナミアオカメムシ（ボゴールにて）

## 自給達成のための研究協力と病虫害防除

私は最近まで JICA の専門家としてボゴールの食用作物研究所で大豆病虫害防除の研究協力に従事してきた。それはインドネシアでは大豆の病虫害、ことに害虫の被害がけた違いに大きく、強い協力要請があったからである。

この国でもアチェ地方のように、平均 2 t/ha に及ぶ高収量で、しかも病虫害の発生が非常に少ない地帯があること。その要因は土壌が大豆に適していることもあるが、特殊な栽培体系によって、この国で最も被害の多いサヤメイガ類の発生が、うまく防止できていることが判明した。これと同じ土壌条件の地帯を大豆の主産地に指定し、このような栽培体系を取り入れ、重点的に指導をすれば、所定の生産をあげるのは決して難しくないのである。

多くの大豆生産地では、いまでも 5 回から 10 回もの薬剤散布を行っている。これを 2, 3 回程度で害虫防除が十分できるようにしなければならない。その一つとして私はオトリ作物を大豆畑に作ってカメムシをおびき寄せ、薬剤で効率的に叩く方法を研究し、実用化した。

害虫の発生が非常に多い原因の一つは、大豆が、害虫に弱い品種だからである。耐虫性品種の育種が今後重要である。

ところで、肝心の病虫害問題についてはあまり言及できなかったが、これはまた別の機会にしたい。

（国際農林業協力協会・東京農大総合研究所 内藤 篤）